

献 辞

経済学部教授 伊 藤 修

牛嶋俊一郎先生は、平成 25 年 3 月末をもってご退職となった。先生の学問に詳しいとは言い難い私が僭越ではあるが、ここに献辞を述べさせていただく。

牛嶋先生は、長崎東高等学校、東京大学経済学部を卒業され、経済企画庁に入られた。以後、物価局、総合計画局、調整局を中心に要職を歴任されたほか、二度にわたりパリの OECD に赴任され、経済政策委員会の副議長も務められている。学部のパーティーに先生が差し入れられる赤ワインは秀逸で（ごちそうさまでした）、また先生が「これはいいですよ」とおっしゃるものは間違いなく美味しかったが、パリ時代に舌と知識を磨かれたものと思う。最後は総合計画局長、内閣府経済社会総合研究所の事務方トップである次長と、役所の最高責任ポジションまでのコースを歩まれた。にもかかわらず、超自然体リベラルというべきか、いわゆる偉そうな態度は一度も感じたことはなく、当方はまったく平らな感覚でお付き合いさせていただくことができた。

これらを経て平成 21 年 4 月に本学部に着任され、主に経済政策論を担当されたほか、STEPS で短期留学生向けの英語による日本経済入門なども引き受けられ、学部として大変ありがたいご貢献を賜った。私のゼミ生たちも、先生の授業は安易ではないがマクロの力がついたと一様に語っている。

研究発表面では主としてマクロの分野のものが多くと拝察するが、日本経済のみならずロシア、中国、韓国、インドなど諸外国の経済問題を扱われたものも少なくない。本学においても、「我が国における GDP ギャップとデフレ：オクン法則に基づく新しい GDP ギャップ指標の提案」（『社会科学論集』133 号、2011 年）などを発表された。よく用いられる内閣府および日本銀行の GDP ギャップ（いわゆる需給ギャップ）推計よりもかなり大幅なデフレギャップの存在を示唆するものであり、2~3%、10 兆円強という内閣府・日銀のデフレギャップ推計に「そんな簡単なレベルなのだろうか？」という疑問を禁じ得なかった私としては先生の推計値の方が納得できる感じがする。

専門分野が重なるわけではない私が先生とご一緒した機会が多かったのは、大学院博士後期課程の指導や審査の場であった（なぜか相当多かった）。そうした際に触れた先生の学問的態度は、徹底的にオーソドックスを踏まえるというものであったように思う。新しかったりインプリケーションが興味深いとしても、明晰な論理や実証の穴がなく、オーソドックスからの乖離があってもそこからの道筋が明らかで、つまり十分に自然に理解可能でなければ、安易に納得したり同意したりはできないという断固たる態度と受け取られた。みなさんご存知のとおり先生はきわめて柔和であるが、納得するまで絶対に安易に妥協せず、とことん真偽を突き詰める不動の追求的態度は、もう少し早めに切り上げる嗜好のある私としては驚異的であった。単に疑問を呈するだけでなく、ご自身で代替的な分析を試みられてきてそれを提示されることもあった。ここまで身を挺した熱心な指導（もはや研究会である）は正直みたことがなく、頭が下がるしかない。こうして改善された博士論文はいくつもあったと思う。

先生は研究テーマとして「持続可能な内需主導型経済成長の実現のための方策」を掲げてこられた。デフレの原因は需要不足であるとの基本見解も堅持してこられたと思っている。根拠不確かな、ときに

明らかに歪みの入った説にもとづく政策が次々に提唱されてくる今日、先生には今後も、怪しい説、社会をミスリードするとき説には厳しいチェックをかけ、真正面からの政策を提示するご活躍をお願いしたく思う。

こうした真摯な態度は、通常の業務でも一貫されていた。カリキュラムやその他の業務運営の慣行について、わからないところは基本から質問して確かめられていた。必ず納得して進むということであったと思う。先生のようなポジションまで極められた場合、おれは何でもわかっているという態度を示す方もお目にかからないわけではないので、ご無礼ながら若々しい精神を感じた次第である。

勝手と失礼を書き連ねたが、長い期間とはいええないものの、手抜きをされず何事にも真摯に向き合う先生と一緒に働かせていただき、充実しました。また学部に多大なご貢献をいただきました。お礼を申し上げ、今後もお元気でご活躍下さるよう祈念するものであります。